

## 巻頭言

### - 情報系センターの多様性と共通性 -

佐賀大学総合情報基盤センター長 只木 進一\*

「学術情報処理研究」No. 10 主査

国立大学法人情報系センターに関わる協議会、連絡会議などの再定義を受けて、本誌「学術情報処理研究」も、全ての国立大学情報系センターを対象とするものに改まりました。国立大学法人の発足に伴って、情報系センターの設置形態が多様になりましたが、共通の問題設定も重要になっています。情報系センターの設置形態や役割の多様性と共通性について考えてみます。

各情報系センターの多くは、計算機センター(室)としての前史をお持ちと思います。汎用機と専用端末を持ち、その計算資源を学内に提供するセンターです。その性格が大きく変わり始めたのは1990年代です。ネットワーク基盤を整備し、学内にサービスすることが重要な役割の一つとなりました。もう一つは、情報処理教育のための基盤整備と実施です。ネットワークサービス、認証、多数の端末などの運用技術が情報系センター間の共通の話題でした。

2000年以降では、電子図書館や認証の統合の話題がでてきました。情報化が本当に力を発揮するのは、複数の情報システムにわたって、データと業務の連携ができた時です。法人化によって、情報系センターの設置形態が自由になり、一気に、図書館や事務情報との連携が進んでいます。

こうなると、大学で行っている教育、研究、大学運営の全ての業務に情報系センターが関わる可能性がでてきます。実際、情報処理教育に強い関与をするセンター、計算機科学研究センターの性格を持つセンター、電子図書館機能に関与するセンター、事務情報を含めた情報基盤運営のセンター、大学データベースなどの大学評価に関与するセンターなど、その役割が多様化しています。また、図書館や事務組織との組織統合を行っている大学もあります。それに対応するように、本誌に掲載される研究成果も多様化しています。

役割を発揮する側面は多様化していますが、基盤となる技術は共通性を有しています。ネットワークの安定・安全運用(セキュリティ)、利用者管理と認証の統合、多数の利用者に使いわせるための操作の容易性と安定性の確保などです。これらを教科書的知識ではなく、現場で培われた運用経験に基づく知として共有財産とすることがますます重要になっていくと思います。特に、規模や安定性の問題に関しては、現場で培われた知が重要です。

役割の多様化に対して人的体制が追いつかないことも、残念ながら、情報系センターの共通の話題でしょう。人的体制が追いつかないことが、技術的合理化を進めるモチベーションではありません。しかし、そろそろ、技術だけではなく、人的体制の整備や他の部門との連携といった、組織論に関する研究や提言も必要でしょう。

本誌「学術情報処理研究」が、情報系センターの多様性を踏まえて、共通的知識・技術の発信地として、その重要性を増していくことを期待します。

\* 〒840-8502 佐賀県佐賀市本庄町1

[director@cc.saga-u.ac.jp](mailto:director@cc.saga-u.ac.jp)

